

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

列福を迎えるころ

日本カトリック司教協議会
列聖列福特別委員会

平林 冬樹
イエズス会司祭

代々の信仰を忠実に生きる長崎の多くの信者にとって殉教は身近に感じられると思います。苦難の末に血をもって神の愛を証しし、長く続いた禁教と信教による差別の時を耐えて守りぬいた先祖たちの信仰は、殉教の生き方そのものです。長崎には、他の地域の教会に見られないほどの強い殉教の霊性が、いまも息づいているようです。

今年列福される殉教者は、全国9教区にゆかりの人びとです。しかし列福に対する捉えかたには温度差があるように感じます。日本の殉教といても、現代とはかけ離れた遠い昔の出来事のように思われがちです。また信教の自由が保障された時代に、殉教そのものが意味を失ってしまっただけでは、という人もいます。現代の日本では、信仰への迫害によって

いのちを奪われることなど考えにくいことは確かです。

また「殉教」ということばには、何か暗く重いイメージがつきまといます。過酷な拷問やむごい刑罰、それらに打ち勝つ英雄的振る舞いを賞賛する紹介が一般的でした。また信心をかきたてるため、美化された苦難の物語が書かれました。そのため、殉教者と聞いても、平和な現代の信者には、あまりぴんと来ないという声が聞こえます。

しかし「神の国の到来」を告げ知らせたイエスのメッセージという観点からみると、殉教はイエスの生き方、つまり神への愛の証しそのものです。私たちに与えられる新しいいのちは、父なる神への愛のしるしである十字架、つまり殉教の生き方と、それに対するおん父の答えである復活をとおして実現することを、イエスはその生涯をもって示しています。ですから殉教を理解しなければ、イエスのことが分からないと言っても過言ではないでしょう。福音書に描かれる弟子たちも、死んで復活し

たイエスに出会うまでは、イエスがいくら受難を予告しても、それを悟るどころか、イエスの死を受け入れることができませんでした。

「殉教」という訳語は、殉職や殉死というように、死ぬことを第一にイメージさせます。しかしもとのことば「Martyria」の第一の意味は「証し」です。神の愛がどのようなものかを余すところなく証ししたのは、イエス・キリストでした。人間は愛する存在です。大切な者のためにいのちを与える人は、もちろんイエスの前にもいました。しかしイエスは、究極のかたちで神の愛を示しました。つまり神と人を裏切る者を含む全人類のためにいのちを捧げる愛そのものの神の実像を示しました。イエスの後に従い、神の愛が信じるに足ることを自分のいのちをかけて証ししてくれる人こそ、真の証しびと(martyr=殉教者)です。ですから殉教者といわれる人びとの生きかたと死にかたは、必ず、イエスの受難の姿に重なるはずで、イエスが敵に渡され十字架上で死を

迎える姿と異なるなら、それは殉教とはいえませんが。たとえばキリスト教以外では、あることのために雄雄しく戦っているのを落とした人を殉教者として称えます。しかしキリスト教は、それと大きく異なります。イエスが捕らえられるとき、弟子の一人は剣を取って戦おうとしましたが、イエスはそれを許しませんでした。イエスは神への愛のため、完全な非暴力と権力者への従順のうちにいのちを落としました。

これこそ殉教です。江戸時代初期までの殉教者とはより、明治期までを生き抜いた潜伏信徒たちも、イエスの示した道を歩みとおしました。彼らは終末的な希望を堅く信じていたからです。

列福式まで、あとわずか。前教皇ヨハネ・パウロ二世が来日時に賞賛した日本の殉教者たちのところを、わが国のキリスト者の霊性として、いつそう深めていくために、長崎の信者の果たす役割が、ますます期待されています。

Q&A...

「福者への道」



中浦ジュリアンの像

Q. ある日、カトリックでない方に「福者ってなに？」と聞かれて、内輪向けの説明ではとても通じると思えず、困ってしまったんですが・・・。

A. 本来純粋に内輪の宗教行事であるはずなのに、列福式開催を機会に、一般メディアも、このようないざいに関心を寄せるようになりました。内輪の事柄だから、内輪だけに通じることばでの説明で済ませていればよい、という考え方もあります。外側の人は自分で勉強すればよいのではないかと。

しかし、いまこの時代に列福式という歴史的出来事が企画されたということ。そして、教会内外を問わず、関心と呼びつつあるということを考えれば人間の世界を超えて意志がそこに働いているという受け取り方をするのが、信仰者の態度だとも言えるでしょう。

説明の仕方次第では、「それだったら、わたしたちとも無関係ではない」と言って、共感する方々が現れないとも限らないからです。

さて、「福者」ですが、公式には「聖人になる前の位」であると説明されています。あるいは「天国の幸福をすでに受けていると認められている者のことである」という表現もあります。

この説明で、内向けの説明は十分かもしれませんが。あるいは、所詮こういうことは一宗教教団内のことであり、自分たちとは関わりないことだと割り切っている、一般の方々にとっても十分かもしれません。

かえっていろいろ説明すると、俗っぽくなつて、本来の意味を見失うことにもなりかねません。

ただ、それらの説明から、さらに一歩踏み込んでいく努力は、わたしたち内輪の者の理解を深めるためにも、有意義なこととは思いますが。

Q. 具体的に福者について、一般社会の人々にも通じる説明の内容を、教えていただけませんか。

A. 勿体ぶるわけではありませんが、聞く人の立場や考え方によって、受け取り方が、それぞれ違うでしょうから、これが一番よいという説明を固定化することはよくないと思います。

しかし、基本的なことを踏まえることができれば、そこから適切な説明が生まれるきっかけにはなるでしょう。

「福者」とは、文字通りにとれば「幸福者」、つまり「しあわせ者」ということになります。「真にしあわせ者とはだれか」という問いかけを、自分と自分の周囲に発してみても、「福者」ということばをじっくり味わうだけでも、「福者」ということばに向かう一歩になるのではないのでしょうか。

聖書の根拠を言えば、マタイ福音書5章のつぎのようなことばになります。

「わたしのためにのしられ、迫害され、身に覚えのないことで、あらゆる悪口をあびせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。」(マタイ5・11と12)

しかし、「福者とはだれか」「真にしあわせな者はだれか」というテーマをしかける限り、この聖書の逆説にいどまないわけにはいきません。

どうやら27年前、前教皇ヨハネ・パウロ二世は長崎を訪れ、この謎を解いたのではないかと思われまます。謎解きの証として、26聖人殉教地を「至福の丘」と命名されたのでした。至福とは、しあわせの極みという意味です。

いったい前教皇はどんな謎解きをなさったのでしょうか。この聖書のことばにヒントを求めらるならば「わたしのために」ということばにあると思われまます。

「わたし」とは誰かと言えば、この聖書のことばはイエスさまのことばですから、イエス・キリストご自身ということになります。イエスさまのためにこれらの苦しみを迫られるとき、それは、究極のよるこびであり、しあわせの極みということになります。

Q. それはやっぱり、内向きの説明でしかないのではないのでしょうか。

A. そのとおりです。故ヨハネ・パウロ二世もこれから先の説明をしておられません。その代わり、日本の殉教の歴史を掘り起こし、殉教者に再度現代の舞台に登場していただいて、教会と社会の未来に責任を持てるような説明を見つけてるよう道を示されたのです。

188名の殉教者たちは、この聖書のことばを、ことばの純粹な意味で、現実に生き、そして死んでいきました。しかも特別に選ばれたエリートでもなく、わたしたちとあまり変わらない普通の人間でした。

ということばは、わたしたちもまた福者への道をたどることができるということの意味しています。

この聖書のことばの「わたしのために」の「わたし」を「愛」ということばに置き換えてみたらどうでしょう。真の「愛」に魅せられた者が、どのような行動をとるかということ「わたし」に魅せられた者がいかなる道をたどるかということと並べてみれば、謎が少し解けてくるかもしれません。

人間には「人を恋う」力が秘められています。その力のことを「愛」と呼びまます。キリスト者にとつては、その愛は「イエス・キリスト」という人格を持つ者と重なります。

キリスト者以外の方々にとつては、「愛」という名で住みつき、多分、キリスト者の現実の生活による「証」すなわち「現代の殉教」に触発されて、その愛はイエス・キリストという具体的な顔を持つものになるのでしょうか。

人は愛ゆえに傷付き、愛ゆえに迫害され、愛ゆえに誤解されます。そして、それらの抵抗勢力を雄々しく克服させてくれるもの、それもまた、ほかならぬ「愛」です。

そして、人はその愛の道をたどるとき、その道こそが「しあわせ」への道、すなわち「福者」の道であることを悟ります。

もし、故ヨハネ・パウロ二世が再び長崎にいられたら、このような説明をされたかどうか、それは誰も分からないことではありますが……。



新しい要理

「共に歩む旅」

(10)

第八課 神はご自分の民を

エジプトから救い出された



そのような苦しみや試練は、個人や社会や民族や国家の中でも起こります。

左上の写真を見ましよう。」

【進行係】（参加者たちに質問する）

①写真に現れている人々が、どんな苦しみを体験しているのか具体的に話し合ってみましよう。

②私たちの体験している困難や苦しみはどんなものですか。

B. 神のことは

紀元前1250年頃イスラエルの民は、エジプトで奴隷のような生活をしていました。エジプト王ファラオの抑圧によって苦しんでいた彼らが神に祈り求めた時、神はモーゼを通してこれに答えられました。イスラエルの民は、エジプトから解放される経験を通して神体験をすることになります。

【進行係】

「どなたか出エジプト記3:1-12（モーゼの召命）を読んでくださいませんか。」

・・・聖書を読む・・・

「ほかの方がもう一度読んでく

ださいませんか」

・・・聖書を読む・・・

「次の聖書の句を一人ずつ祈るような心で読んでください」

（同じ句を3度繰り返し読んで読む間、他の人々は沈黙を守る。）

「民の苦しみをつぶさに見」

(3回)

「その痛みを知った」(3回)

「連れ出すのだ」(3回)

「必ずあなたと共にいる」(3回)

【進行係】（参加者たちに質問する）

①「つぎの絵はどんな事が起きていることを表していますか。」

②「モーゼは神のどんなみ言葉を通して勇気を持つことができましたか。」

神はモーゼを通してイスラエルの民をファラオの抑圧から解放されました。神はイスラエルの民を抑圧と死の状態から生命と自由の国へ導かれました。このことを「過越し」と言いました。それはイスラエルの民にとって「神が私たちとともにおられる」という強い実体験でした。これは私たちが受ける洗礼の秘跡の中に込められている意味でもあり、神の国に向かって

【進行係】（参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集い始める）

「一人か二人の方が祈りで神さまをこの集いに招いてくださいませんか。」

（誰でも自由な祈りを捧げるか、以下の例文で祈ってもよい）

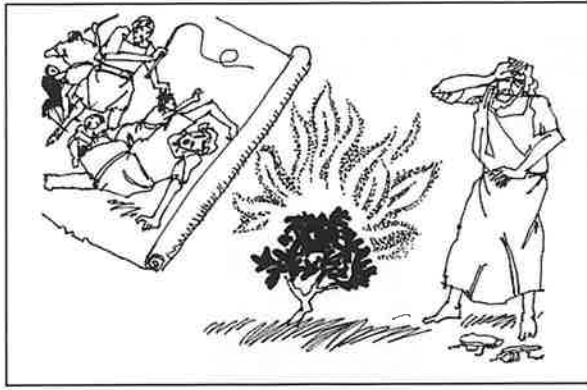
- ・主よ、この集いにおいてくださり導いてください。
- ・主よ、ここに來てくださいさり私たちに平和をお与えください。

A. 私たちの生活

【進行係】

「私たちは人生の途上で、よく苦しみや試練を経験します。」





進む神の民の旅を象徴しています。

あなたたちのいる家に塗った血は、あなたたちのしるしとなる。血を見たならば、わたしはあなたたちを過ぎ越す。わたしはエジプトの国を撃つとき、滅ぼす者の災いはあなたたちに及ばない。この日は、あなたたちにとつて記念すべき日となる。

あなたたちは、この日を主の祭りとして祝い、代々にわたつて守るべき不変の定めとして祝わねばならない。(出エジプト記12・13・14)

【参考聖書】

*出エジプト 2・23・25

神が民の泣き叫びを聞かれる

*出エジプト 12・1・14 主の過越

*出エジプト 14・21・31

イスラエルが紅海を渡る

C. さらに一歩進んで

旅をつづけよう

イスラエルの民は神の助けで、エジプトの奴隷としての暮しから脱け出して、自由の民となることができました。現在私たちは何かの奴隷になっていないでしょうか。私たちは何から自由になる時、神がくださった本当の自由を享受することができますでしょうか。

【進行係】(参加者たちに質問する)

①私の考えと行動に最も強く影響を及ぼしているものについて考えてみましょう。

つぎの「例」を参照しながら私の考えや行動を左右する基準が何なのか3つ以上書いてみましょう。

【例】お金(財産)、家庭の幸福、名誉、成功、人気、人情、健康、信仰、良心、利己心、

友情、自分の幸福、愛国心、慣習、罪意識、達成感、法律、規則、学歴、肩書き、時間、ほかの人々の評価。

②それぞれ自分が書いたものを発表してから、お互いに比べて、私たち(私たちの共同体)に最も強く影響を及ぼしているものの順位を決めてみてください。

③私たち、または私たちの社会を動かしている行動基準が、神のみにそつているかどうかを考えてみて、皆で話し合ってみましょう。

④万一神のみに逆らうことがあるとすれば、どうしなければならぬか話してみましょう。

【進行係】

自由な祈りを捧げながら集いを終わりましょう。

【進行係りの心得】

『過越し』ということばは、全聖書の中心テーマでもあります。イスラエルの民の解放のとき、死をもたらす神の使いがかられらの家には入らず、通り過ぎたことに由来します。

そこから、死からのちへ、抑圧から自由への開放を意味するようになりました。新約聖書では、キリストの「復活」が新しい過越しとよばれることとなります。

【覚えましょう】

23. 「過越し」とはどんな意味ですか。
* 死からのち、束縛から自由への解放という意味です。

24. 「アレルヤ」、「ホザンナ」はどんな意味ですか。
* 「アレルヤ」は歓喜の叫びで「神を賛美しよう」の意味であり「ホザンナ」は「救ってください」という意味でしたが、民衆の歓喜の感情から「万歳」という意味に変わりました。

25. 神が全能の方なら、なぜこの世に悪と苦しみがありますか。
* キリスト者にとつてこの問いへの答えは、イエス・キリストご自身です。イエス・キリストの苦しみと死と復活の意味をくり返し味わうことによつて、その答えに辿りつくことができます。

前号では「第五課」としていましたが、「第七課」の誤りでした。ここに訂正しお詫びいたします。



「発達障害」を知る

最終回
西村良男

ね！きれいな
絵でしょう・・・



ぼくはこれが
得意なんだ！



第四部

青年期からの発達障害

集団の中でうまくいかずに、トラブルを起こしがちなアスペルガー症候群の子どもたちも、適切な支援が受けられれば、高学年になるにつれてトラブルは目立たなくなってきました。そのころから、彼らは周囲に気を配り、他人の気持ちや考えが読めるようになります。そして、青年期には、かなり安定した生活ができるようになると言われます。

これは、自分と他者との違いに付き、その違いをなくす努力をするからです。この時期に周囲の人たちが彼らを丸ごと受け入れてくれると、とても助かります。しかし現実には、多くの学校や職場がそうはなっていないようです。

そのような障害を持つ本人たちの手記等から、一部を要約して紹介します。

1. Kさんの願い

社会生活がほとんど普通にできる

アスペルガー症候群の人にも、自閉症特有の障害があることを信じて欲しいとKさんは訴えます。

例えば、雑音としか思えないテレビの砂嵐の音がとても魅力的に聞こえる人、普通の蛍光灯の光が目につき刺さる矢のように感じられる人、布地のほつれがまるで剣山の針のようにつきつき感じたりする人、しゃべれるはずなのに、話しかけに对应せずにニヤニヤしている人、些細なことまで泣きわめく人なども、世の中にはいることをわかってほしい。

こういう人は不可解を通り越して不愉快な印象をもたれたり、「とてもできない事をするがありがたりのこと」ができる人」としか見えないだろうが、「人類には、自閉症の人とそうでない人の二種類の人がいる。でも、やはり人類の仲間である」、これが世間の常識になって欲しい。だから、仲間はずれにしないでごく普通の隣人になつてもらいたい。そして、こういう人を「困った人だと思ふのではなく、困っているのは本人自身」だという観点で見してほしい。

2. Nさん（翻訳家）の場合

小学生の頃はほとんどトラブルを起こしたことがなく、おとなしく手のかからない子で、人見知りも後追いもせず、聞き分けもよい子だったそうです。

彼女は、「親が好きで親の言うことに従ったのではなく、親の要望を、これは世界の法則だと誤解して、なんでも本気で納得していた。以前に見たパワーショベルがどれも黄色だったので、パワーショベルは黄色いものと思ひこみ、初めて緑のパワーショベルを見た日は、自分の知っている世界は壊れてしまい、絶望して泣いた」と言います。

〈小学3・4年ごろ〉

このころ、「何かおかしい」と気が付き始めました。悪戯をしてもよその人には叱られなかったので、そのことを悪いこととは思わずにいたら親にきつく叱られたり、子どもは大人より不完全だから子どもと仲良くなつても役立たないと信じていたのに、「友だちがいらないのは信用がないからだ」と親に言われたりして、



ショックの連続でした。

〈中学〜大学の時期〉

小中学校では、不得意な科目を頑張るように言われていたので、それが大切な決まりだと思い、理系科目が苦手だから、苦手克服のために理工学部に進んだら、授業は分らず成績は散々。それでも、「努力すれば何でも克服できる」という根拠のない希望は持ち続け、自分を鍛えるために、わざわざ自分には向いていない職種や職場ばかりを選んで、またまた失敗の連続。

ところが、お金の稼げない彼女でも、市民運動やボランティア団体は歓迎してくれました。効率は悪くとも、せかさねず、叱られずに、様々な作業を経験することができ、少しずつ事務能力も身につけて、ついには、自分は文章を書くのが得意だということも知ることができた、とNさんは述懐しています。

(杉山登志郎編著「アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート」より)

3. Mさんの場合

パソコンに優れた技能を持つMさんは、パソコン専門学校の講師に雇われましたが、すぐにクビになりました。それは、彼が遅刻ばかりしたためです。Mさんは授業に間に合うためには、自宅を何時に出ればよいかが分らなかつたのです。

彼はまた、ひとつの仕事にとりかかると前に、3〜4時間はボーっとして過ごす必要があります。その後だと何時間も仕事に集中できると言います。

そして、何をどうに収めればよいかが判らず、部屋中散らかり放題だった彼が、整理上手な友人の部屋をビデオ撮り、それをチェックしながら整理したら、見事に部屋の片づけに成功しました。



以上、「発達障害」について述べてきました。

今言えることは、ADDやADHD、またアスペルガー症候群にしる、早期に専門機関による診断と専門的な指導訓練を受け、周りの人々の支援

を受けられれば、普通に社会生活ができるようになるということ、そして、親や教師の無関心や無理解によって放置されると、二次障害(いじめ、不登校、引きこもり等)を起こす可能性もあるということです。

また、発達障害は学校や家庭や障害を持つ子どもだけの問題ではありません。大人にも、自分の障害に悩む人たちが当然います。仕事の効率が悪くとも、せかさねず、叱られず、周囲の人たちの支えのある環境ならば、彼ら特有の優れた才能は活かされるはず。そのためには、全ての人が発達障害を知り、それを理解し、みんなで温かく支え合う社会の実現が求められます。国が「発達障害者支援法」を制定したのはそのためなのです。

【参考図書等】

- ・アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート(学研)
- ・シリーズ「発達と障害を考える本」①〜④(ミネルバ書房)
- ・高機能自閉症・アスペルガー症候群及びその周辺の子どもたち(同成社)
- ・「ADHD これぞ子どもが変わる」(主婦の友社)
- ・「実力を出しきれない子どもたち」(NPO法人・えじそんくらぶ)

【相談機関】

- ・各教育委員会の教育センター
- ・教育相談所・各自治体の子ども課など
- ・心の教育総合支援センター(長崎大)

このシリーズでは、問題行動の場面ばかりが出ていますが、発達障害の人がいつも問題行動をおこしているわけではありません。発達障害の特徴的なさわりの部分だけを紹介しました。詳しく知りたい方は、書店で関係図書を求められるか、インターネットで検索して調べてみてください。また、発達障害があるかどうかは軽々しく判断せず、相談機関や医療機関などに早めに相談することが大切です。

聖書

豆知識

四旬節

復活節の過ごし方は・・・



Q.

四旬節、復活節の時期になりました。四旬節を復活節と比較すると、四旬節にはどうしても私たちを陰鬱にしまう雰囲気が出ています。四旬節にはキリストの受難と死を黙想し、犠牲と回心を心掛けながら日々の生活を送るためか、何となく暗くて、重苦しい空気が漂っているからなのでしょう。しかし復活節は、死を滅ぼして栄光に上げられたキリストの勝利を強調しているだけではなく、私たちもその栄光ある姿に与かる喜びを分かち合うことが出来る季節です。でも四旬節は、キリストの復活をよき準備の内に迎えるための大切な時であることもよく理解しています。そこでこのキリストの復活ですが、聖書を読みながらどのような点を黙想したらよいでしょうか。

A. 全く私の個人的な意見かもしれませんが、参考までにご紹介します。四旬節は、キリストの受難と死を黙想しながら、自分自身と毎日の生活を絶えざる犠牲と回心の業によって浄化していく季節です。だからこそ、自分に厳しさが要求されます。しかし実際には自分に甘く、厳格さをどうしても生きられない自分に気付きます。その時こそ、私たちは自分がいかに弱い人間であるか認識し、自分の本当の姿を知る機会になります。でもたとえ自分の弱さを目の当たりにしても、自分自

身から逃げることは出来ません。私たちは自身と共に生き続けるのなら、その弱さと真摯に向き合っていかなければならないのです。

キリストから選ばれ、彼と全てを共にして来た弟子たちも例外ではありませんでした。キリストが十字架上で亡くなった後、彼らはキリストの弟子であったという理由で、師である彼と同様に殺されるかもしれないという危険性を感じていたのです。それはヨハネ福音の、「弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。」(20・19)に見事に表現されています。たとえ彼らはキリストの直弟子であったにしても、彼らの師のような完全性を身にまとった強い人間ではなかったのです。彼らは、自分たちの置かれた状況を考えると、とても不安だったのでしよう。生前キリストは人々に引き渡されて殺されるが、三日目に復活すると語っていたにもかかわらず(マルコ8・31、9・31、10・33・34)、彼は徹底的に師の言葉を信じていることが出来なかったのです。けれどもキリストは決して彼らを見捨ててはいません。むしろ彼らが、弟子として再起することを望んでおられたのです。

そうしたご自分の弟子たちが立ち直るきっかけを与えたのは、取りも直さず、復活したキリストご自身でした。私が重要視していることは、福音書もパウロも触れているように、彼はすぐに御

父のもとに戻るのではなく、この地上に留まって弟子たちを叱咤激励するために、彼らに姿を現されたことにあります。パウロは言っています。

「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりのわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりの三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたらしく、大部分は今なお生き残っています。次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。」(1コリント15・3・8)と。キリストは亡くなったが故に弟子たちから離れ去ったのではなく、逆にキリストは死してもなお、彼らを中心に愛し、いつまでも彼らと共にいられたのです。

キリストの死と復活は彼ご自身の単なる個人的な出来事ではなく、私たちとの関係をより強固にし、私たちといつまでも共にいて下さることのような気がします。復活したキリストと出会う時の彼らの反応は、ヨハネ福音の「弟子たちは、主を見て喜んだ。」(20・20)という言葉に凝縮されています。私たちも、四旬節から復活節にかけて、この言葉を共に分かち合えるように、よき準備を通して主キリストの復活を喜びたいものです。私たちがキリストの弟子である限り、彼が私たちから離れ去ることはありません。さらにこの確信を深めていくことこそ、真の意味での準備なのであり黙想なのです。

(湯浅 俊治)

愛の波動！



水の結晶には、いろいろな形があるそうです。その水の結晶を通して、「人間の生き方」を考えさせられる本に出会いました。そこには実際にいろいろと変化した水の結晶の写真も載せています。たとえば、水は言葉が分かります。音楽が分かります。絵も分かります。そして、祈りが通じるというのです。

それは、まるで生き物のように波動が伝わって、その水の結晶に影響があるというのです。

中でも「言葉が分かる」というのは、「ありがとう」とか「愛」「感謝」の言葉を語りかけたり、言葉を書いたものを見せると、とても美しい結晶を示しているのに、「ばかやろう！」の言葉では、結晶が全く崩れているのです。

水に語りかける言葉によって、美しい結晶になったり、結晶にならなかつたりするということでした。

では、このように、水が言葉の影響を受けるなら、人はどうなんだろう。良い言葉を受けた人は、良く変化しないだろうか、と考えました。

「いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそキリストイエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです（1テサロニケの信徒への手紙5・16～17）」

ある集まりで、Yさんが聖パウロのこの言葉を実際に生きた体験を語ってくれました。

『ある日、バスに乗るためにあと2分しかないので急いでいたら、体の不自由な方がおられました。その方を無視すれば、バスに間に合うはずでしたが、その方の中にイエスさまを見た私は無視して通り過ぎることが出来ずに、声をかけ挨拶しました。

すると乗ろうとしていたバスが私の横をスーッと通り過ぎて行ってしまったのです。その時 私はこの「どんなことにも感謝しなさい」というパウロの言葉を思い出し、主に祈りました。

「主よ、どんなことにも感謝することはあなたのお望みです。今バスに乗り遅れたことも感謝します。そして、あなたはお望みなら車をつかわしてくださることもお出来になります。車をつかわしてくだされば、それを感謝しますし、つかわしてくださらなくても、それもあなたの望みですから感謝します」

すると、この祈りと同時に車が来て、私のところに止まりました。それは、顔見知りの信者さんでした。私がこれから行こうとしている目的地に近い所の方でしたので、車に乗せてもらいました。

その車の中で、私は今祈ったことをその信者の方にお話しました。

その方は、その頃、どのように祈ったらいいのかと悩んでいたそうですが、私の分ち合いで、その方はこのように祈ることが出来るということを知ったそうです。もしかしたら神さまは、この信者の方にこの「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。」ということを伝えなかったのではないか、だから、私がバスに乗り遅れたのではないかと思ったのです。

生活の中で、マイナスに思えるような時でも、すべてをなさる神さまに感謝することは、神さまのお望みなのだと思いました。』

Yさんの話を聞いた信者さんは、すべてを神さまに感謝することを始め「神に感謝！」と祈るようになったそうです。

また、学校の先生をしている方は、この話を生徒たちにも伝えたそうです。

こうして、Yさんの話は、波のように伝わっていきました。

一人の方の良い体験は、良い波動をもたらしてくれたのです。

主のみ名において、順境の時も、逆境の時にも「神に感謝！」という生活ができれば、それは神さまのお望みなのでしょう。

(大浦雪子)





殉教地を訪ねて・・・

今年11月に行われる列福式を前に、いろいろな巡礼が企画されている。その中で、昨年11月には、長崎から米沢、京都への巡礼が行われた。それに参加した人々は、それぞれに感動と、新たな力をいただいて帰って来られた。

そこで、今回は、その巡礼に参加された方にいろいろと伺ってみた。

◆今回の巡礼は、どこへ行かれたのですか。

米沢の「北山原（ほくさんばら）殉教地」、京都六条河原「元和の殉教地」、デイエゴ結城了雪神父が殉教した大阪の3カ所でした。

◆特に印象に残ったところはどこですか。

「北山原殉教地」です。

東北の人たちがキリスト教に出会ったのは、1590年にキリシタン大名蒲生氏郷が、黒川城に入ったときであり、米沢に共同体が生まれたのは、1611年にフランシスコ会士ルイス・ソテロ神父が立ち寄ったときと言われています。

そして、この米沢では、1629年1月12日に53名が3ヶ所で、首を切られて殉教しています。そのうち、5歳以下の子ども9名が含まれているのです。

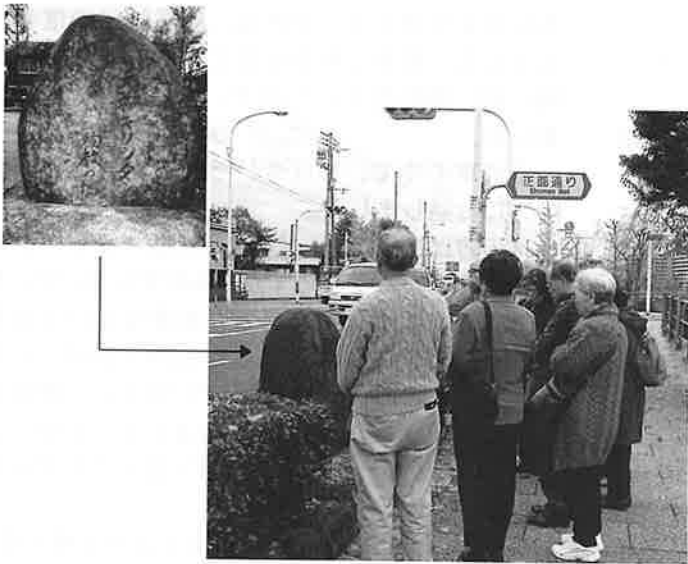
米沢で殉教した人々は、他の地と比べて、特別な光を放っていると言われます。それは、この地で殉教した人々は、最期まで好意を持たれていたことです。そのため、この地の人々は彼らの死を

悼み、悲しみ、彼らのなきがらは、その信者でない人たちの手によって、葬られたと伝えられているのです。米沢教会は巡回教会だったため、一人の宣教師（司祭）にも恵まれず、信徒の手によって教会は成長したといわれます。

今回、強い信仰を最期まで貫いた殉教者たちに接し、感激の中で祈るのみでした。

◆その他の巡礼地はどうでしたか。

京都六条河原の「元和キリシタン殉教の地」の記念碑は道路沿いにあるのですが、そこで殉教地の鴨川を背にお祈りができてとても感激しました。



「元和キリシタン殉教の地」の記念碑の前で・・・

この京都では1619年10月6日、52名が十字架に付けられ、火あぶりの刑に処せられ、殉教しています。そのうちには、15歳以下の子どもが11人いました。中でも、身重の母と5人の子どもの話ですが、母テクラは3歳の子どもを抱き、十字架にかけられ、その十字架の両横に2人の子どもが縛られ、そして、隣の十字架には2人の子どもがかけられていました。火は放たれました。母は息絶えるまで、この子どもたちを励まし、息絶えた後にも、3歳の娘を胸にしっかりと抱いていたといわれています。

この母子の感動的な殉教の姿を思い巡らしながら、暫したらずんでいました。

大阪では、カテドラルの聖堂で、この地で殉教したデイエゴ結城了雪神父のことを思い巡らしながら祈りました。

彼は、五畿内で宣教活動していた最後の司祭でしたが、1636年2月、穴吊りの刑（享年62歳）でその道のりを終えたといわれています。

◆列福式を前にして、どのような思いがありますか。

188名の殉教者の信仰環境をみますと、信仰エネルギーの源泉は家庭にあることがよく判りました。その代表的なものが、先に述べました日本三大元和の殉教で、主役は母子が中心になっています。強い信仰は家庭内で育まれたことを実感しています。

信仰の同心円、波長の源である家庭での信仰を「ガッソ」と再認識させられています。



一 教区評議会

研修会報告

昨年のことになりますが、11月24日(土)、25日(日)の両日、長崎教区七地区および二つの承認団体から3名ずつの参加者を得て、約30名参加の研修会が行われました。

とても深みのある霊的なお話を聞いて、ありがたく受け入れて味わい、これを日常の糧とする研修会も素晴らしいものです。しかし教区評議会という新しい形で出発したいま、もっと自立して、自分たちの手作りの研修会にしようという合意のもと、分かち合いを中心とした形で進められました。

それにしても一定の流れはあらかじめ決める必要がありますから、全体に四つの区切りをして進行していくことにしました。

*第一セッション・教区評議会設立の経緯

ここで40年前の公会議後、180度と言ってよい方向転換をした教会の、具体的受け皿をつくるために、どのような歴史をたどったのかをみんなで確認し合いました。

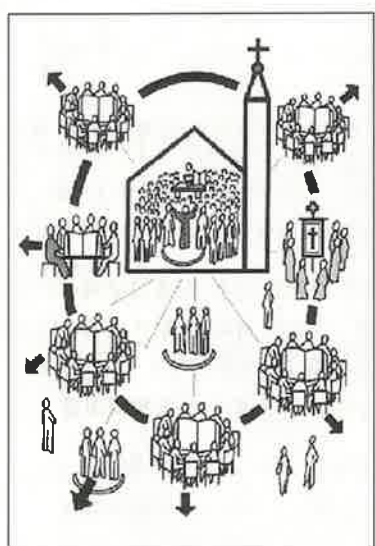
公会議が指し示した変化が、あまりにも大きく衝撃的であったため、これを受け止める器である組織をつくってはみたものの、あま

りよく機能しなかった段階がありました。しかし、40年を経て、具体的プランとしての評価も得つつある、小共同体づくりを中心としたアシパプログラムなどが現れ、ようやく教区づくりの具体的な形が、描ける時期になってきたことを学び合いました。

*第二セッション・小教区づくり第五段階

①主任司祭中心の教会 ②小教区評議会中心の教会 ③活動団体中心の教会 ④自覚する教会 ⑤小共同体で結ばれた小教区共同体

このような小教区づくりのひな型を目前におくことは、とても有意義なことであるし、どうしたらという方法まで不十分ながら議論は及びました。



小共同体で結ばれた小教区共同体

*第三セッション・教区ビジョンの考察

大司教の理念である「参加し」「交わり」

「宣教する」教区づくりについて、わたしたちの活動の源泉であり、同時に方向を示すものとして確認し合いました。

*第四セッション・福音化および具体的総合プログラム(アシパプログラム)

現代の宣教は「福音化」ということばでも呼ばれるように、社会の善意の方々ともいっしょになって、キリストの福音に向けた教会および社会づくりをすることです。

宣教とは単に教会から社会に向けてキリスト教の知識を宣伝することだけではありません。

「宣教」ということばを聞くと「わたしたちにはできません」という間髪を入れず返ってくる反応を一掃することを求められています。ある地区では、小共同体づくりについて各小教区3・4名のメンバーで構成する宣教行動隊を組織して動きはじめたことも報告されました。

「金を出さなければならぬのなら、信者をやめる」と言われることがある。こんなケースなども紹介され、このことへの対処法など活発な意見が交わされました。

ちなみに、この具体的な問題提起に対する解決法として、みごとに秘策があることがこの研修会で判明いたしました。

生活教会 の中の



野首教会

フォトプラン 山本 富夫

無人の教会

津和崎瀬戸を渡り「野首」の浜をあがると、忽然とレンガ造りの教会堂が姿を現す。

野崎島に信徒の移住が始まったのは一八〇〇年代という。やがて、一八七七年マルマン師が巡回以後、諸師の巡回が続く。一九〇八年十月、教会堂献堂。鉄川与助最初のレンガ造り。その時、野首と船森の信徒はわずか十七戸であったという。極貧の中で建立したその信仰と犠牲は想像を絶する。

無人島の教会堂は一時期荒廃したが、善意の人々によって大修復。今年、献堂百周年を迎える。